

近畿産業考古学会 第2回見学会報告

（向こう見ずにも）近畿産業考古学会に入会した私。
5月に開かれた第1回に引き続き、
第2回の見学会@京都にも参加させていただいた。
その報告を（性懲りもなく）させていただきたく。
廃道には直接関係ないけれど、やっぱり、
面白いものは面白いのだっ。

（nagajis：永富 謙）



■京都三条通の歴史的建築物巡り

——煉瓦建築から江戸風情まで

この日の集合場所は「**三条通と烏丸通の交差点**」。京都の町をよく知らないnagajisなのでちょっと不安に思ったけれども、何とか時間通りに到着できた。皆さんはすでに到着済みで、都合13人の大所帯に。

行く先は三条通りの近代建築群だ。三条通りはかつての東海道だった場所で、明治の中ごろまでは京都一の名抜き通りだった。さまざまな会社の京都支店がここに集まり、今でもその建物が残っている。まずはこれらを見学しながら、高瀬川へ向かおうという日程になっている。

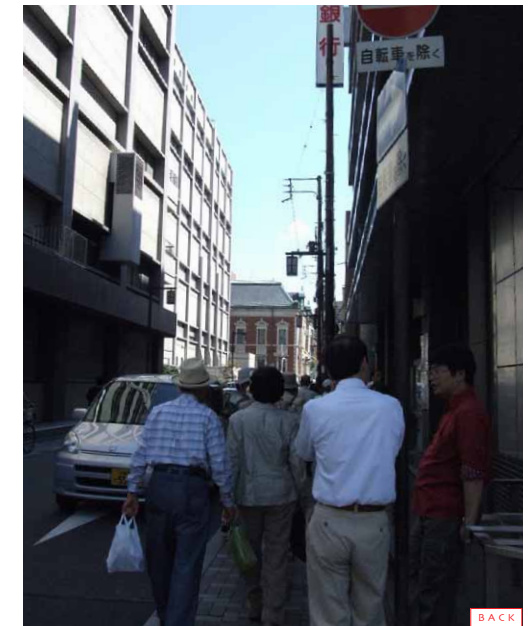
狭い小路を進んで行くと、最初に目に飛び込んできたのは立派な煉瓦作りの建物。これは1902（明治35）年に建てられた**京都郵便電信局**の建物（今も中京郵便局の局舎として使用中）。赤い煉瓦と大理石の白の組み合わせが美しい！自分はいつも橋やトンネルだとかの煤けた煉瓦ばかり見てきたから、なおさら目が覚める思いがした。特にこの日は雲一つない快晴。青い空とのコントラストも見事！

続いて現れるのは**旧・日本銀行京都支店**（1902（明治35）年）。今は京都文化博物館になっていて、この日はアート作品のフリーマーケットが開かれていた。

中に入ってまっ先に思うのは、天井の高さ。中央の大き



行き掛けに見つけた古建築。旧・北陸銀行の建物だとか。今日前半はこういった近代建築巡りをする



三条通は思っていた以上に狭い。今は幹線道の役割を終えたが、かつては東海道の終点であった



旧・京都中央郵便局 通りが狭いので以降こんな写真が続きます



設計：吉井茂則、三橋四郎（逓信省常務課）。日本で初めてファザード保存を行なった建物

な一室が吹き抜けになっていて巨大な空間となっている。何というか、さすがは銀行、という威厳がある。

ここから右手の小部屋を通過して——部屋ごとにアクセサリや絵葉書のショップがあって面白い——、裏手にある旧金庫室へ。これも煉瓦作りで、いかにも重そうな大きな扉がつけられている。本館とは別棟の建物になっているのは、やはり不慮の火災に備えたものだろうか。

自分はあまり建築に詳しくないので、細部をあれこれと言い表わすことができないのが残念。そのかわり、設計者が辰野金吾であると聞いて「なるほどな～」と感心したことが一つあった。この建物も煉瓦が小口積みなのだ。

辰野金吾は明治時代に活躍した大建築家。東京駅の赤煉瓦駅舎を設計したことなどでよく知られている。彼は建物の表積みに小口積みをよく取り入れていて、東京駅などもまさにそんな小口積みの名建築だ。

珍しくそんなつながりがわかって嬉しくなったnagajis。細部を写真に収めておこうと、旧金庫室の表にある換気口？らしい場所にカメラを向けた。そうすると……

あれ、これ、どうなってるの？ 表から見ると確かに小口積みなのだけれど、換気口の角（表面）は1/4以下の煉瓦が張ってあるだけだ。えーっ、小口積みじゃ、ないの？

他の所はどうなっているのだろうと思い、建物の同じ面の角を覗いてみた。写真ではちょっと見えにくいけれども、



旧・日本銀行京都支店 設計：辰野金吾、長野宇平治



小口積みの壁面。目地の仕上げが丁寧！



内部中央は吹き抜けに。天井が高い



フリマでよく見えないが…裏手の金庫室



あれ？ 化粧張り？

角の煉瓦は3/4煉瓦で正しく組んでいる。煉瓦張りなのは換気口回りだけなのか、それともこの角も「見せる」ものなんだろうか。何か子細があるんだろうなあ……。

表に出た一行は、柴田先生（今回の見学ルートを設定して下さった）や岡田先生（見学会幹事）の引率に従って三条通りをどんどん東へ。現代的なビルが並ぶ中に、ふい、と古い建物が紛れ込んで建っている。足袋の老舗「分銅屋」（幕末頃の京都町屋建築）、塔のような概観が美しい「旧・日本生命京都支店」（1914（大正3）年）、「旧・不動貯蓄銀行」（1916（大正5）年）などなどなど。「旧・不動貯蓄銀行」はテナントビルになっていて、半ば自由に立ち入り可。木製の階段や手すりに触れて、当時を思うことができる。

興味深かったのは「家辺徳時計店」の建物。これは1890（明治23）年に建てられたもので、ここまで見てきた建物とは違い個人経営の店舗だったそうだ。いまの外観でも充分豪華に見えるけれども、かつては屋根に大時計のある塔が載っていたという（帰って見つけた京都市文化観光資源保護財団のページに当時の写真あり）。また、洋館風の概観ではあるけれど、背後に和風の居住棟があったり通り土間があったりする、京町家風の作りになっているのだそうだ。

この建物については、所有権（賃貸？）のこじれがあるようで、その裏話を伺うこともできた。建築物に限らず、古いものを残すというのはとても大変なことだと思う。



看板だけで失礼！ 分銅屋。今は足袋を製造販売しているが、かつて金融業をしていた名残りの屋号



旧不動貯蓄銀行 設計：日本建築株式会社



旧・家辺徳時計店。個人的にはいちばん印象に残った建物



ほかあこれくらい雑な煉瓦のほうが好きです（爆

さらに進むと、通りはアーケードになってしまう。さすがにここでお終いかな、と思ったら、柴田先生が「ここにも紹介したいものがあります」。見上げると現代的なビルの表に古ーい看板が掲げている……。何て書いてあるんだろう？ みすやおはり？

「これはみすや針店の看板です。隣にもう一つ屋根付きの看板があります。みすや針店は江戸時代から続く針専門店、今でも営業してるんですよ」と。確かに、その看板が掲げられたビルの右手に細い通路があって、その奥に屋号が掲げられている。通路を抜ければビルの裏手に、小さな庭と和風の建物が隠れるようにして建っていた。へえ〜〜！

かつての敷地をビルテナントに提供して、自身はつつましく営業中。そうして看板は大事に掲げている（掲げられている？）。いいなあ、これが京風なのか。

ちなみに屋号は、御所の御用達になったことから「御簾屋」の屋号を賜ったのだとか。宮中に勤める女性は入内する時に必ず裁縫道具を持参する習わしになっていたのだとも教わった。東海道をはるばるやって来た旅人にとっての最後の「ショッピングモール」でもあったわけだし。

結論。三条通りは不思議な世界。



この写真の中に300年前が紛れ込んでいます。わかるかな？



みすや針店の看板。竜の彫り物が見事！（左上にチラッと見えているのもみすやの看板）



ビルの片隅の通路の奥に針店の入口があって…



潜れば小さな庭園と、お店。奥ゆかしいというか何というか。。

■ 島津創業記念館

—— 京都で生まれ育った技術屋魂

三条通りのアーケードを抜けると河原町通。北上して御池通りを越え、次の目的地、島津創業記念館を目指す。

名前の通り、**島津製作所**の創業からの歴史を伝える記念館。島津製作所というと、近年田中耕一さんが**ノーベル賞**を受賞したことで記憶に新しい。nagajis個人的にも研究室でSHIMAZUの**ガスクロ**のお世話になっていたこともあって、ちょっと親近感の湧く会社だ。

とはいえその歴史を知ろうというほどの熱狂的ファンではないし、産業技術の歴史にも疎い。そういう程度の私がやってきた訳だけれども……いやあ、面白かった！ 一つの会社の記念館というべきではなくて、京都の産業の近代化、技術の近代化の片鱗を見せてくれるような、そんなスケールの大きな記念館だと思ったほうがいい。「日本の廃道」読者のみなさんにはあまり関係のない話で申し訳ないけれど、あまりに面白かったので、かいつまんで紹介したい。そのかわり、建物内部の写真は遠慮して撮影致しませんでしたので、ここからしばらく文字ばかりになります（汗

初代社長の島津源蔵は天保10（1839）年生まれ。初めは仏具や表具の金物を作る金物師をしていたという。それが明治の**廃仏毀釈令**でお寺さんが廃れ、商売が続けられなく



本文とは無関係だけど…御池通と河原町通の交差点にある京都市役所。これも立派な近代建築、とだんだん建物を見る目が変わってくるのが我ながら面白かった



島津創業記念館。木屋町通りに面して建つ。外見は創業当時のもの

なり、転身した（こんな所にも影響が！>廃仏毀釈）。転身先が、「理科の実験道具作り」だ。

もともと、この店の近くには京都府が建てた理化学工業研究所「**舎密局**」があった。陶器やガラス、七宝焼などの製造研究から、石鹼、ソーダ水作りまで、果ては塵芥所というリサイクル施設や牧場まであったらしい。この付近一帯が時代の最先端だったわけだ。

そうした科学が広まろうという時流に乗って、島津源蔵はフラスコやビーカーなどの実験機具を作り、学校へ販売した。二代目もまた源蔵の名前を継いで、事業をさらに発展させた。二代目現源蔵は実験機器ばかりでなく、実用的な製品作りにも力を入れて成功した。例えば当時日本に伝わってきたばかりのX線発生装置を安価で作り、医療用のレントゲン装置へ発展させたり、バッテリーの材料となる粉末鉛を効率的に作る方法を発明したりしている（これがきっかけとなって、今の**GSユアサ**の前身となる会社が生まれた。GSバッテリーのGSって、Genzo ShimazuのGSなんですよ。知ってた？）。さらにこの粉末鉛は防錆塗料の原料にもなり、今の大日本ペンキの基礎も築くことになる。

ちなみに、島津製作所の島津と鹿児島島の島津とは親戚関係ではないんだそうだ。黒田藩勤めをしていた先祖が島津侯から名前を賜ったのが島津姓を名乗るきっかけになっただけという。館に入ってすぐのコーナーに家系図が置かれ、

そのことを解説しているのも、自分のようなオッチョコチヨイが多いからだろうと思った。なおこのコーナーには舎密局に勤めたお雇い外国人の**ワグネル**が初代源蔵に贈ったという木製旋盤が展示されている。もちろん実物だ。

資料館の内部は2人の島津源蔵の来歴を紹介するコーナーに始まり、明治、大正、昭和に作られた島津製品を展示するコーナーへと続く。この展示品コーナーも、島津の～というより、日本の実験機具の歴史が一堂に会した、みたいな感がある。小中学校の時に理科や実験が好きだった人なら「あ、これ見たことある！」というのがオンパレードで、楽しめること請け合いだ。例えば**空気抵抗の実験管**。二つのガラス管の中に、鉄片、紙切れ、羽毛が入っていて、一方は空気が入っており、一方は真空。空気の入った管をさかさにすると、空気抵抗があるから3者の落ち方が違う。鉄片はすっとんと、紙切れはゆっくり、羽毛はひらりひらり。真空にした管は抵抗がなくて、みな等しく重力に従って落ちて行く。「空気」「抵抗」「重力」という見えないものを誰にでもわかりやすく説明するための実験機具だ。

あんまり沢山あって一つひとつ取り上げられないのが残念だが、電卵直立形検流計幻灯機タムソン氏反照検流計硝酸アンモニウム製氷器スタンマー氏比色計ホルツ氏管触覚計指力計塩化水素合成管携帯用電流計などなどなどと畳み掛けるような実験機具の数々に圧倒されてしまう。

島津製作所製ではないが、明治の小型パイプオルガンも展示されている。これにはいわくがあって、いろんなものを器用に作った二代目源蔵がパイプオルガンを自作する参考に購入したものだという。しかし、分解して研究してもこれだけはどうしても自作することができなかつたとか。

実験機具コーナーの次は、カタログや社史などの文献資料コーナーと実験コーナー。ここでは島津源蔵の人と知りることができる。大きな額に入れて掲げられているのは、島津製作所が発明したレントゲン装置の「広告」だ。ちょうど扁額のような横長の額に、X線の原理から効能までを事細かに記したもので、店舗に掲げたのだという。一般の人に向けた広告なのに「電子の制動が云々」と原理から説明している所に、源蔵の技術者らしさがよく出ている。

また、源蔵が作ったという社訓も掲げられていた。「事業の邪魔になる人」「家庭を滅ぼす人」と題してあって、それぞれ15の訓がある。読んでみると身につまされる言葉が並んでいる……「共同一致の融和心なき人」「自分の行ひに就いて反省しない人」「仕事を明日に延ばす人」……うへえっ(汗。そのうえ、こうも書かれている。

「以上の三十ヶ條はいづれも處世の要道であつて…
(中略) …然るに若し之を読むも皮相にして底の真理を味解するに至らず或はたゞ知るのみにして之を貫き

行ふの熱意を缺く者は必ず一身一家を破滅の淵に陥れるのである」

つまり、読んで覚えただけではだめだ、真意を知り実践して初めて役立つのだ、と念を押しているわけである。他の参加者のみなさんもこの訓に思い当たる節が多々あるようで、とても恐れ入った様子だった。帰りにコピーをいただいた(同館のwebサイトでも同じものを掲載しています)。

最後は島津製作所の主要生産品だったレントゲン装置について。初期のものは高電圧を得るためのキャパシタがクローゼットくらいの巨大なもの(実際家具様の観音扉の箱に納められている)。パーツが漆塗りだったりするのもいかにも時代的だ。それがだんだんと小型化され、自動車でも楽に運べるようになり、また戦場で使える携帯型にまで発展していくさまが展示されていて、これもまた面白かった。

何より館を案内して下さった館長さんの喋りがうまい。時間が超過するのも忘れて楽しませていただきました。

島津創業記念資料館 <http://www.shimadzu.co.jp/forest/>

所在地 〒604-0921 京都市中京区木屋町二条南

電話 075 (255) 0980 FAX 075 (255) 0985

入館料 大人300円 高・中学生200円

開館時間 9:30~17:00 (入館は16:30まで) 休館日 水曜日、年末年始

■高瀬川に沿ひて下る

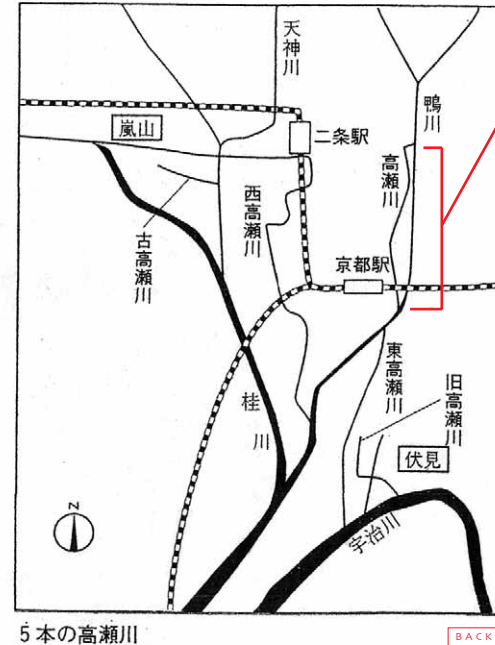
——江戸～明治の物流幹線の今

昼食は向いの料亭「**がんこ高瀬川二条店**」で。え。ナニ贅沢してんだ、だって？ 何も料理が目的じゃない、高瀬川の源流がこの店の庭園から始まるから、仕方なく……。

高瀬川というと、みなさんはどんなイメージをお持ちだろう。京都にはあまり馴染みがない自分だが、それでも高瀬川という名前だけは耳にしたことがある（森鷗外の小説もあるしね）。京都の町中を流れる船運の水路だが、今は普通の溝川のようになっていて、昔の面影はほとんどない。言ってみれば水の道の廃道だ、というのはちょっとこじつけかも知れないが、こういう機会でないとなんか足を運ばないだろうと思う。違う方面にも首を突っ込んでみたいと常々思っているnagajisにとっては、まさに渡りに高瀬舟。それは違うか。

今回の見学コースは、高瀬川の船運の研究をしておられる柴田先生が立案したものだ。先生によると高瀬川の研究や著書は多いけれども、高瀬川の源流、特に高瀬川の水を鴨川から引き込む辺りがどうなっていたのかは、ほとんど知られていないとのこと。そういうところにも惹かれるものを感じる。

今回たどる高瀬川

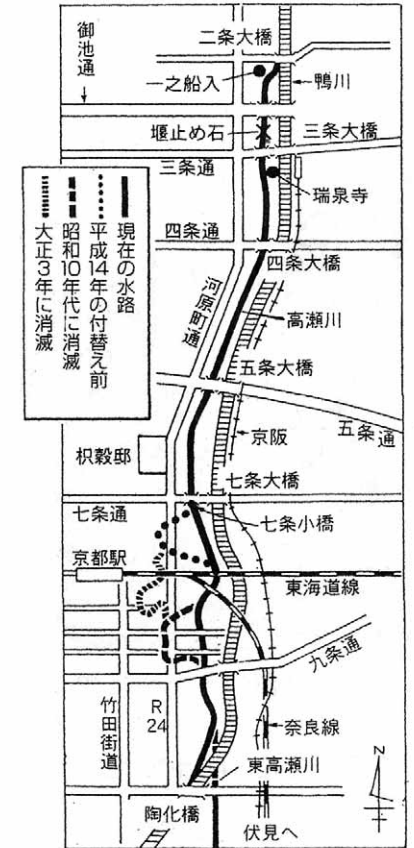


5本の高瀬川

BACK

高瀬川マップ

(いずれもいただいた資料から引用)



高瀬川散策マップ

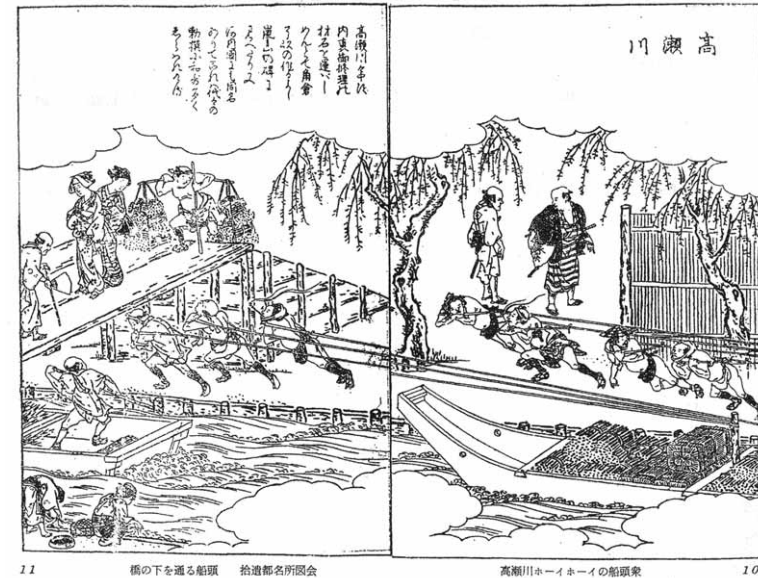
BACK

近畿産業考古学会では、毎月初めに「ニューズレター」をいただける。会員の皆さんが投稿した訪問記や資料紹介などがあって、大変参考になるものだ。この19号（2007.6.1.発行）に、柴田先生による「高瀬川の源流を訪ねて」という報が載せられている。これを参考にさせていただきつつ、まずは高瀬川の歴史を振り返ってみよう。

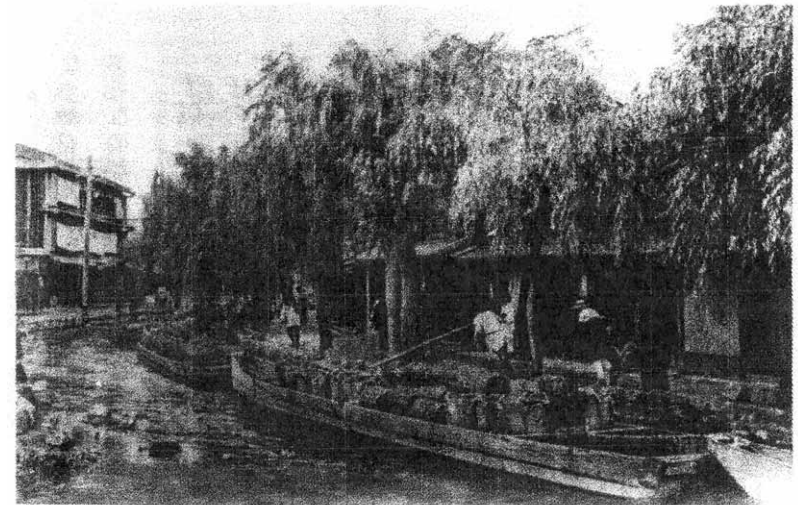
いわゆる高瀬川は、豊臣秀吉が方広寺に大仏殿を造営を行なった時、材木などの輸送のために開削されたのが始まりとされる。運河を開いたのは角倉了以^{すみのくらしやうい}。当時は十条から七条辺りまでの短いものだったが、了以が引き続き工事を行なって、二条から淀川（宇治川）までを結ぶ運河に改良した。以降約300年間、京都と伏見の間の重要な運輸機関として活躍した。明治の中ごろまでは運河としての命脈があったことになる。

完成当初は新川と呼ばれたが、運河を行き来するために使われた平底の船「高瀬舟」にちなんで高瀬川と呼ばれるようになった。この船に荷を積んで高瀬川を上り下りするわけだが、上りは人力で「引っ張って行った」という。昔は川べりに歩くスペースが作られていて、船につけた綱を引き引きそこを歩いて引き上げたのだ。

当時の近畿の船運は淀川（宇治川）が最も大きな幹線で、高瀬川もその宇治川に接続していた（一度鴨川に出て、鴨



江戸時代の高瀬川の船引（いただいた資料から引用）



曳き子は綱の先を輪に編んだところを胸に当て、前かがみで、地面をはうようにして「ホーイ、ホーイ」とかけ声をかけながら一步一步綱道を踏みしめていった（明治の末ごろ、高瀬川正面付近で＝田中泰彦編「京都藝情」から）

明治末頃の高瀬川（いただいた資料から引用）

川を横断し、今の東高瀬川を下って宇治に着く)。当時は宇治川から二条まで二時間かかったという。直線距離で15kmほどだから、普通に歩くのとほとんど変わらないのがちょっと驚きだ。ちなみに午前中は上りの一方通行、午後は下りという使い分けがされていたそうである。

今日の高瀬川は二条にある料亭「がんこ高瀬川二条店」の庭園から始まっている。元を正せばその水は鴨川と平行して流れる水路「みそそぎ川」から引かれたもので、さらにみそそぎ川の元を辿れば鴨川にかかる鴨川大橋の下流から取水しているという。しかし二条より北のルートについては詳細を記した資料がなく、当時からの通りだったかどうかはわからないようだ。

さて、それではそんな高瀬川をたどってみよう。まずはみそそぎ川の取水口から。みそそぎ川は鴨川の河川敷に面した土手の上を流れていて、川というより水路といったほうがふさわしい姿をしている。がんこ高瀬川二条店の辺りに堰があり、これで庭園の中へと水を引き入れている。このあたりの川や堰の構造は当然近年のものだ。

最初の高瀬川の姿はどんなものだったのだろうか？ 柴田先生の想像では、この取水口付近から直接鴨川の水を引き入れていた可能性もある、ということだった。確かに今は鴨川の水位が低く、川面より数メートルも高い所に取水口



BACK

今日の高瀬川の始まる地点。手前の小川がみそそぎ川で、正面の鉄柵の辺りで庭園へ水を引き入れている



BACK

取水点を料亭側から



BACK

堰は今の鴨川の河川敷より高い所にある

があるのだが、暴れ川だった鴨川だから、当時はもっと川底が高かったのではないかと……と。

この取水口を庭園の中から撮ったのが右の写真。庭園や料亭はもちろん最近作られたもので、全く運河らしさはない。けれども「川がここから始まる」ということには、やはり感慨深いものがある。

nagajis個人の宣伝になるが、日本海側に流れる川と大平洋への川とを分ける峰「分水嶺」やそこを越える峠に興味があって、webで「分水嶺辞典」というものを公開している。峠に登りながらだんだんと狭くなっていく川を見、その源頭に立った時、それが下流までつながっているという至極当然なことにも感動してしまう。それに近いものを感じた。

閑話休題。

庭園を過ぎると高瀬川は再び暗渠になって、木屋町通りの下を潜り、先ほどの島津記念館の下手に出てくる。すぐに「一の舟入り」と呼ばれた舟溜まり（舟を係留したり方向転換させたりするための場所。大きな濠になっている）がある。舟入りは高瀬川の各所に作られたが、そのほとんどは埋め立てられたり宅地になったりして消滅してしまった。現存するのはここだけだ。ちなみに一の舟入り前の高瀬川には高瀬舟の実物大模型が浮かべられていて、当時を偲ぶことができる。



庭園内から取水口を撮ってみる。取り込まれた水は…



庭園を通して…



「一の舟入り」前に入る。正面奥の濠が舟入り



木屋橋通りの対岸に出て…（正面の白壁建物が島津製作所記念館）

昔の高瀬川は舟を引いて上り下りするために道の両側に通路があった。また舟を引きやすいように川面から道までがとても近かった。当時の写真を見ると道路と水面とがほとんど同じ高さといっていけらいいだ。もちろん、運河の役目を終えた今の高瀬川はそんなこともなく、普通の河川のような姿で流れている。

かつての面影を尋ねながら歩いていると、川の対岸の高い所に「佐久間象山遭難之地」「大村益二郎遭難之地」という碑が（手ぶれがひどくて失礼！）。レリーフもついている本格的なものだ。幕末から明治にかけての京都は「天誅」が横行した物騒な土地だった。彼らのように京都で命を落とした開国論者・知識人はとても多い。碑がここにあるといういきさつはリンク先を参照していただくとして、私は碑が高瀬川に面して建っているというのがひどく新鮮に感じた（ちなみに御池通との交差点にも別の殉難碑が建っている）。

御池通を渡って、再び続く高瀬川。



今日の高瀬川と木屋町通り



高瀬川に面して建つ、2人の遭難碑



ちよ御池通りの御池橋。面白い書体



御池通りを下った辺りの高瀬川

この日実はnagajisは一つの計画があった。計画といったら大げさなのだが、以前「旧橋紀行」で引用した本の中に、明治の末頃に高瀬川に架けられた橋の写真があって、それが今どうなっているのかを知りたいと思っていたのだ。

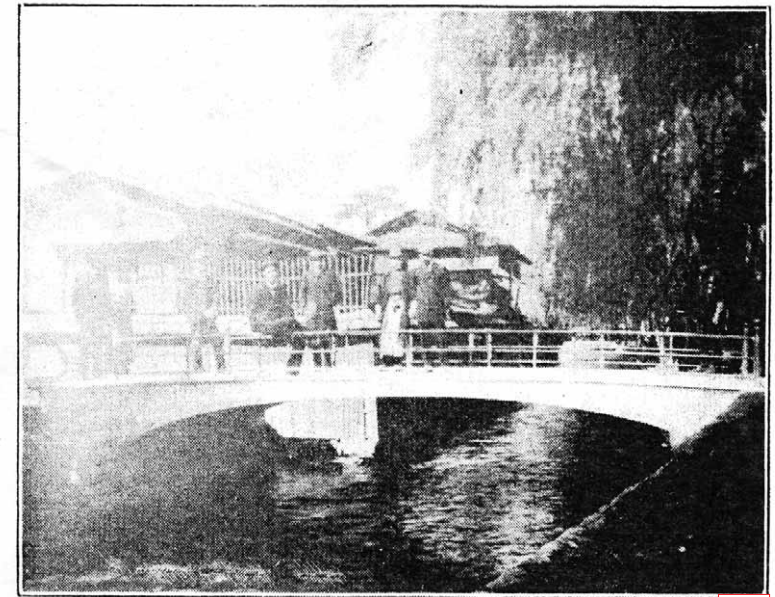
一つは「姉小路橋」という橋で、工事中的写真、完成写真、橋のたもとの風景の3枚がある。キャプションに「京都市高瀬川二架スル姉小路橋鉄筋控架拱（Cantilever）径間拾八呎」とあって、鉄筋コンクリート製のアーチ橋（カンチレバー形式）であることが知れる。もう一つは「六軒橋」という名前だ。

高瀬川には開通当時から数多くの橋がかけられていた。いずれも舟を引いて潜るために桁下を広く取っていたという。しかし写真の姉小路橋は普通の橋だ。運河が使われなくなかったことを暗に示していることになる。

まだ残っていたら面白いのにな……。小路の名前から推測して、そろそろ「姉小路橋」があるんじゃないかとキョロキョロしていると……

あ！ あった！ けど……

残念。普通の桁橋になってました。運河の役目は終わったといっても、さすがに当時のままで残っていることはないよな……。少しがっかり。



BACK

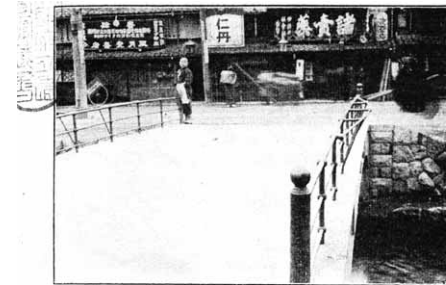
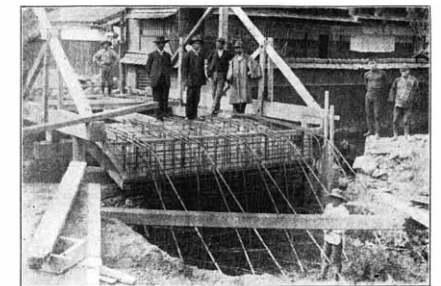


Plate. 3.

BACK



姉小路橋工作中ノ圖

BACK

姉小路橋（原田碧編「鉄筋コンクリート構法」、1924（明治44）刊より引用）



現在の姉小路橋。ガーデン。

BACK



普通の桁橋です…

BACK

それでも「当時」が全く無くなったというわけでもない。姿を変え形を変えて今に生きているものもあることを発見した。

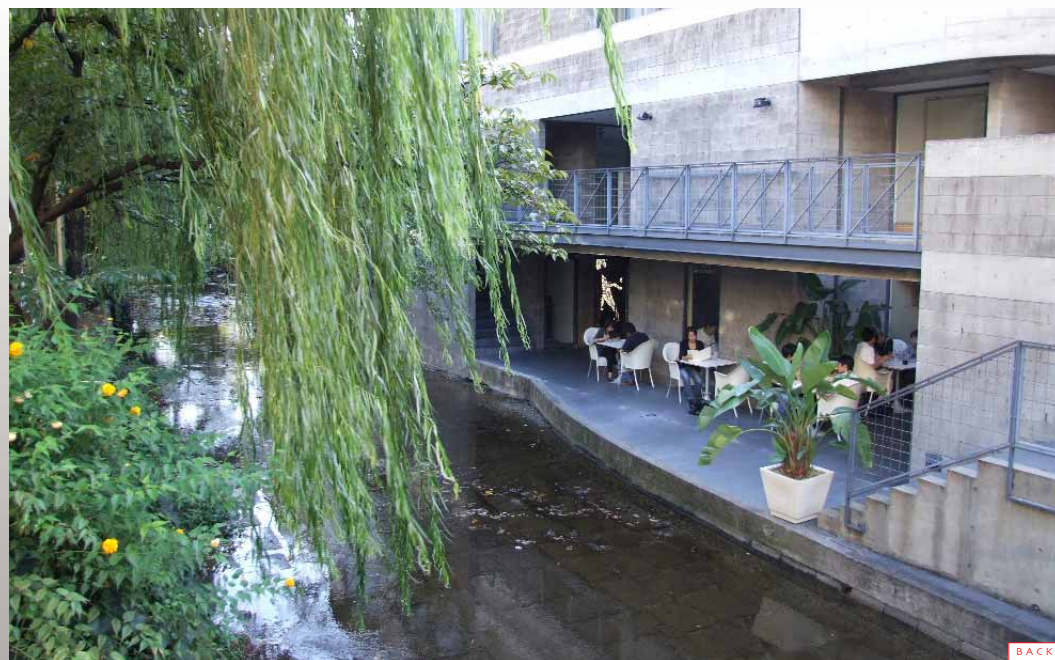
水運華やかなりし頃は、高瀬川に沿って飲食店が軒を列ねていたという。ある場所で、そんな飲食店の姿を伝える解説看板が建っていた。昔繁昌した生洲料理屋を描いた絵図が掲げてあり、川に面した料亭で、男共が楽しそうに飲み騒いでいる。

視線を上げるそこにはほとんど同じ光景が。建物の地階、川辺に近い場所に小洒落たオープンカフェがある。高瀬川の川面がすぐそこにあって、それを眺めつつコーヒープレイク、という趣向のようだ。

昔から「水辺に遊びたい」という欲求があって、それが今でも残っているという、そんなシーンのように私には思えた。穿ち過ぎかなあ。。



1780年「都名所図絵」より、と看板にあった図



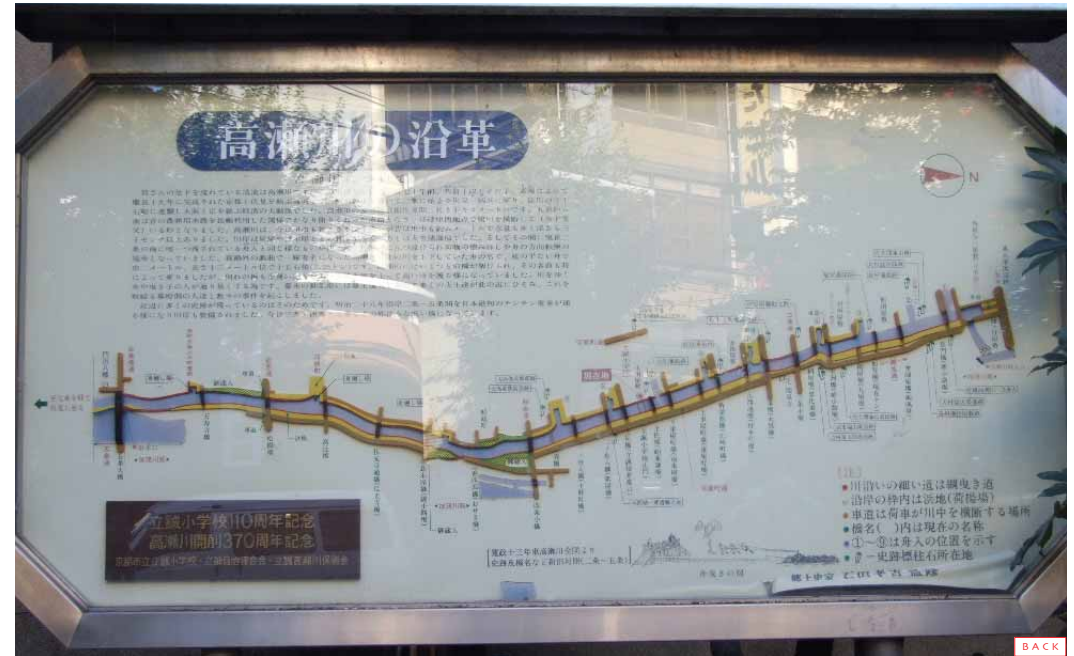
昔も今も変わらぬ光景、かも知れない

蛸薬師の辺りには旧立誠小学校の建物があり、正面玄関の脇に、高瀬川の開発者である角倉了以の顕彰碑が建てられている。高瀬川開削350年を記念し、地域の人々からなる「高瀬川保存会」によって建てられたのだそうだ。

玄関を挟んで反対側には高瀬川流域の解説看板もある。高瀬川沿線では最も詳しいもので、当時架けられていた橋の場所や何やらもここで見る事ができる。(あれ、六軒橋の名前がない…)

ちなみに旧立誠小学校の建物も立派な近代建築。昭和2、3年に京都市営繕課によって建てられたもので、入口のアーチやバルコニー付きの3階窓など、なかなか凝った作りになっている。小学校自体は平成5年に廃校になり、今は地域のイベントを開催したり、テニスコート等の貸し出し利用がされているそうだ。

次に出た大通りが河原町通り。阪急河原町駅が高瀬川に面している。見学会はいったんここで解散し、さらにたどってみたい数名は引き続き南下することに。nagajisもだんだん高瀬川辿りに引き込まれてしまって、ぜひ続きを見たいと思うまでになっていた。数名の中に入らないではいけない。



小学校前に置かれた「高瀬川の沿革」。沿線で最も詳しい解説だ



小学校前の角倉了以の顕彰碑。高瀬舟形の台座に載っている。400年記念には何をしよう



旧立誠小学校 設計：京都市営繕課 鉄筋コンクリート造4階建

四条大橋の袂に建つヴォーリス設計の建物を見たり、フシギな風情のある裏小路を辿ったりと寄り道をしつつ、再び高瀬川に合流。ここから下流は今までのような歓楽街ではなく、旅館や民家が連なる静かな通りとなる。その分(?)高瀬川の扱われ方も少々手荒だ。川のそばに植え込みが作られて、そこに高瀬川があるという感じがあまりしない。上流はまだ川べり近くを歩くことができたのだが……。ゴミが散りがちだった高瀬川が、ますますただの川のように見えてしまう。「もっと景観活用すればいいのに」という先生方の言葉。確かに……。

五条の通りに入る直前で、少しだけ当時の姿を感じることができる場所があった。ここまでずっと川の右岸には建物があって、壁のようになっていたのだが、ここでは川から少し引込んだ所に民家があって、川べりに通路が残されている。そこへ向かうための小さな橋もかかっている。イメージ的には舟を引いていた頃の通路のような感じだ。川に面した勝手口にちゃんと表札が掲げられているのも、こちら側が一つの「表」であることを示しているようだった。



旧・矢尾政レストラン 設計：W.M.ヴォーリス
1926（大正15）年 裏からの眺めもいい



その傍らの小路を通過して…



高瀬川へ。この辺りでは植え込みが深く高瀬川の存在感がない



同左



五条に入る直前で。対岸の川べりに小道が残っている



通ってみる。

広い五条の通りを渡る。ここで初めて、高瀬川が分岐する。取水口がつけられて、一部の水が鴨川に戻るようになっているのだ。

取水口がある、ということなど、普通だったら気にも留めなかっただろう。しかしこうやって高瀬川の「源流」からたどってきた身にとっては重要な発見になる。それがまた面白かった。こういう経験、当たり前前かが違って見えてくる体験ができることは、とても嬉しいことだと思う。

ここには大きな榎の木があって、その榎を祭る祠もある。**源融**の邸宅・河原院の庭にあった榎だという（この河原院が河原町の名前の由来）。またこの場所にはこれまで見た中でもっとも橋らしい橋・榎橋が高瀬川を跨いでいた。コンクリートの開腹アーチ（ヴォールトアーチ）だ。

さらに下って行く。一部の護岸に古いものが見られたけれど、いつ頃のものだろう？ 閑静な住宅地、という趣がますます強くなって、やがて道路の正面に旅館が立ちはだかるように建って、道が半分程狭くなっている所に出る。この旅館もなかなか古いな……と思いながら通り過ぎようとした時、ふっと振り返った傍らの橋が、ちょっと面白いものだった。



五条を渡った直後の高瀬川。正面にアーチ橋が見える！



その前に、高瀬川の分岐点。ここで水量の調節をするのだろう（これより下流は川土手が低くなる）



鴨川の土手に面した排水口。ここから鴨川に水が戻ることになる



コンクリートアーチは榎橋という名前だった。板状のアーチ橋で、表面は洗い出しの化粧コンクリート

ほ？ 鋼アーチ？

パッと見では何とも変な取り合わせだ。コンクリート桁橋に鋼アーチが添えられているような感じ。アーチがひどく錆びているせいでますます違和感が強い。しかもそのアーチがどうやって桁を支えているのか、にわかには解りづらい。あとで確認したら反対側も同じ構造だ。

高瀬川の水がほとんど無くなっているのをいいことに、川に飛び下りてあれこれ観察。なるほど、こうなっているのか……。

そうして橋の銘版を見てびっくりした！ 高瀬川に架かっていた鉄筋コンクリート橋の写真として持ってきていたもう一つの橋、六軒橋だったのだ！ もちろん明治当時の姿ではない。それ以降に再び改修されてこの姿になっていたのだ。この橋については後日、日本の廃道の「旧橋紀行」で紹介したい。それまでに作られた年度などが解ればいいのだけど。

ちなみに、この下流にある上ノ口橋も、ちょっと面白い形式。本体は鉄筋コンクリートのようだが、表にライズの浅い石アーチが組まれている。飾りではなく確かにアーチとして組んだものらしい（それが橋にコンクリートで固定されている）。**要石の処理がいい。**



これが... 探していた六軒橋！ 姿は違えど興味の尽きない構造をしている



明治末頃？ の六軒橋の姿（原田碧「鉄筋コンクリート構法」より）



上の口橋も河原に降りて詳細観察

ここまで来て、nagajisは時間切れ。JR京都駅に向かわなければならぬ。最後まで見届けたい！ という皆さんと別れを告げて、同じくJR近くから地下鉄で帰りはるという柴田先生と 通を西へ向かう。歩きながら京都の町と近代建築の取り合わせの面白さを伺ったり、傍らのだだっ広い駐車場がかつては商店街だったことを伺って、その頃に思いを馳せたり。そうして京都駅にてお別れした。



前回の見学会でも思ったけれども、産業遺産でも土木遺産でも、それと対峙した時に「それが語りかけてくるもの」と、「尋ねなければ答えてくれないもの」があると思う。豪華な建築物を見て、迫力に圧倒されたり、微細な装飾に心を打たれたり、というのが前者だ。誰もがきっと感じるだろうことだ。一方、後者は歴史やそれが作られた背景を踏まえて初めて見えてくるもの。例えば建物の構造だったり様式美だったり、煉瓦の積み方だったり。こちらが「問い」を持っていればいるほど、さまざまな答え＝発見をすることができる。見学会では経験豊富な皆さんが解説して下さるし、寄ってたかって批評をしたりもするから、それをそばで聞いているだけで勉強になる。「あなたはだあれ？」とモノに尋ねるための知識を得ながら、その場で答えまで教えてもらえる。こんな贅沢はないと思う。

改めて、見学会を主催して下さった会のみなさんに感謝！ 次回もぜひ参加させてください。 (な)



nagajisの見た最後の高瀬川。初めの頃に比べてずいぶん浅くなったように感じる。ここまで川に親近感を感じたのは初めて、という一日だった

近畿産業考古学会 第2回見学会報告

この記事の感想をお聞かせください。

公式サイトアンケートのほか、下記フォームからお送りいただくこともできます。みなさまのご意見、お待ちしております！

1. この記事はいかがでしたか？

←つまらない・役に立たない ふつう おもしろい・役に立つ→

1 2 3 4 5

2. コメントをどうぞ！

（空欄でも結構です。内容は「日本の廃道」公式サイトや本誌で公開する場合があります。公開を希望されない場合は「公開不可」にチェックを。）

公開不可